

短歌

唐戸 登美

酩酊の醒めゆくごとき夕空を裸木の枝のあひだより見つ
 俎板の鯉は眼をあけるしや思ひつつわれは胃カメラをのむ
 体重は三八、五キロ古板に棒切れ四本の手と足がつく
 燈を消せば霜月の蚊がおそひ来るいまだ吸ふ価値われに残るか
 身をかざる程にあらねど痛みあとののび放題の髪を切らする
 癒えて浴む紅花風呂に透けて見ゆ贅肉失せし骨皮の色
 おくれたる身をばつつしみ友と歩む老いて黒衣を着るは悲しき
 ふる里の墓碑に同名登美二人共に七十歳を生き得て古し
 高原に陽を浴み座る楽しさよ白内障の眼はかすめども
 目覚むれば日はすでに射す二月二日今日よりわれは八十八歳

辰巳 巳 より 会 り

東京支部 新年例会

平成八年一月十一日(木)
 於・築地スエヒロ

本部新年例会報告

平成八年 辰巳会

新年例会出席者名簿

平成八年一月二十二日(月)

於・神戸「東天紅」

(敬称略)

高木	鈴木	神保	三軒	楠瀬	木下	北尾	東條	東條	金子	金子	金子	小野	落合	鶴崎	大谷	井上	安東	安東
木	木	保	軒	瀬	下	尾	條	條	子	子	子	野	合	崎	谷	上	東	東
き	治	カ	正	清	素	佳	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
ぬ	雄	ヨ	保	明	三郎	賢	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
川	金	鷺	横	横	柳	柳	森	岩	間	松	藤	武	坂	東	中	千代	喜代	幸
計	崎	野	尾	田	田	田	田	崎	野	下	田	藤	東	東	中	千代	喜代	幸
三十七名	雅	和	正	よ	光	辰	好	由	玉	重	健	み	み	み	み	み	み	み
	子	夫	彦	し	子	巳	子	子	枝	男	作	秋	秋	秋	清	子	子	子

辰巳会東京支部恒例の新年会は、おなじみの築地スエヒロにおいて、松の内の正月十一日に行われた。今年の東京は雨なし日の連続で乾燥注意報の出っ放しで、カラカラの天気という毎日であります。この日の天候はというと之又絶好の日本晴で、雲一つなく風もないという誠に恵まれた一日であった。豪雪で交通機関が麻痺している所のことを思うと本場に有難いことと思う。

三々五々出席者が控えのロビーに見える。大体皆知った仲なので新年の挨拶を皮切りに楽しい会話が始まり、新春らしい和やいだ雰囲気となる。

大体全員が揃った所で幹事さんがロビーから宴席の客室に案内される。広い部屋に長方形のテーブルが真白のクロスと花に飾られて

置かれ、明るい電光の下周りの壁の色も映えて清潔な気分のみちている。

定刻まず芦原幹事が新年の挨拶と今日の式次第を述べられ、最初に昨年亡くなった物故者の霊に黙禱する。配られた物故者の名前をみて皆様大変な高齢であることに感銘をうける。

乾杯は立花氏、続いて挨拶は池谷政雄氏。

昨年は神戸の地震に始まり、サリン、住専、不況と良い所がなかった。今年は政権も橋本首相となつたので、きっと明るい景気になることを期待している。連立政権でスッキリした対策がなかった政治が一変してほしい。辰巳会と皆さんの御発展を祈る、とのこと述べられる。

挨拶の途中日商岩井の西尾哲社長が忙しい中をお見えになる。早速、昨年は阪神大震災で会社も社員も大きな被害があったが、全員一致して復旧に努力した結果予定以上の回復がみられた。本場に大

変な年であった。之からは今後の経営再建に向けて色んな角度から考えている所である。きっと明るい展望が拓けると思う。皆さんの健康を祈ります。

との心強い挨拶が述べられた。西尾社長は年頭の予定が大変で間もなく帰られる。



予定の議式がすんだので開宴となる。今日の料理は当店名物のピフテキ。前菜やスープが次々と出る。アルコールやその他の飲物が

東京支部 春季例会

平成八年五月三十日(木)

箱根『山のホテル』で
懇親会と庭園散策

出廻るにつれ、方々で話しが弾み
笑声で歓声が高く、楽しい会場に
一変する。今日は特別な講演がな
かった関係で自由談笑が中心と
なった趣である。

予定の時間になって全員隣の口
ビーンに整列して記念写真をとる。
記念品を頂き散会。外は青々とし
た晴天の春日が続いていた。

(請川記)

辰巳会東京支部新年例会出席者

平成八年一月十一日(木)

於・築地スエヒロ
(五十音順・敬称略)

近藤 三	国廣 五郎	加地 彦太郎	請川 耿益	今村 三郎	池谷 政雄	移川 中	安東 浄建	荒木 正雄	芦原 有一
計	二十一名	長橋 忠男	西川 明子	尾 満寿子	田 辺 満寿子	ご 同 伴	ご 同 伴	立 花 實	代 よし子

昨日の天気予報によれば、本日
は梅雨のはしりか、雨天との事で
折り畳み傘を、用意して家を出た
ところ、雨の降った気配はなく、
幸先良しと集合場所の新宿へ。
皆さん方、にこやかに、益々お
元気そうで若々しく、参加者十四
名の、全員お揃いになれる。
バスは、小田急ハイウェイバス
で、定刻の九時出発。新宿副都心
の高層ビルを右手に望みながら、
都心の渋滞もなく山手通り、首都
高速三号線、経由、東名高速へ。
バスはスイスイ走り、間もなく海
老名S・A着。五分間停車の休憩
後出発。東名高速は拡幅工事が完
成した所為か、バスは快調に走り、
窓外の丹沢山地の緑豊かな景色と
共に、気分を爽快にして呉れる。
お天気も心配された雨もなく、

雲も高く薄くなり、間もなく前方
の山あい、残雪を戴いた富士山
が見え隠れしだす。東海道を旅
する時、日本一の富士山が、見え
るとほんとうに楽しくなり、反対
に見えない時は、一抹の淋しさを
感じさせられる。

富士見えずなんばんの花
そよぐのみ(薔橘)

バスは、やがて、御殿場I・C
より地上に下りて、国道一三八号
線経由、乙女峠にさしかかる。こ
の辺りよりの富士山の眺めは、誠
に素晴らしく正に天下の絶景哉。
残雪を戴いた頂上より、新緑の裾
野への、緩やかなスロープの稜線
は、雄大な末広がりとなり、眼前
に展開して迫ってくる。

新緑の富士の裾野は末広に
三郎

バスは、乙女トンネルを潜り抜
け、箱根の仙石高原へと進み、
付近のゴルフ場の鮮やかな芝生の、
文字どおりのグリーンと共に、手

入れの良く行き届いた庭園に、満
開の真紅のつつじが咲き競ってい
る、高級リゾート保養所等とが、
醸し出す素晴らしい雰囲気の高原
地帯を、清々しい気持ちで通り抜け、
程なく美しいプリュウの湖面の、
芦の湖畔の桃源台に到着する。

早速、幹事さん方の案内で、皆
さん方足取りも軽やかに船着場へ。
幹事さん方、乗船切符の手配やら
で、何かとご多忙を極められる。

この頃より、ちぎれ雲が見られ
時々薄日がさし出して、絶好の行
楽日和となり、湖面を通り抜けて
来た涼しいそよ風が、頬を優しく
撫でて誠に爽やかで快い。

芦の湖で薫風かおり辰巳会
三郎

観光船は平日にも拘らずに略満
席で、流石に日本有数の観光地で
ある。間もなく出港、箱根町経由、
元箱根迄のミニ航海が始まる。
観光船は朱色等を彩られ、湖面
のプリュウとのコントラストが、
一段と美しい。本船は、おとぎの

国の海賊船と云われており、エキ
ゾチックで幻想的である。周囲の
緑豊かな山々の間を、相当なス
ピードで一路南下する。そうだ、
芦の湖と云えば富士山。箱根町近
くで、後甲板より富士山方向を眺
めると、雲の切れ間に、時々残雪
の白い頂が、ちらほらと見え隠れ
する。思わず一句ものにする。

残雪の富士の頂ちらほらと
三郎

元箱根に到着。ミニ航海とは云
え誠に楽しい限りで、名残りを惜
しみつつ上陸する。暫くして、
『山のホテル』よりの専用マイク
ロバスに乗車する。

『山のホテル』は、元箱根の芦
の湖畔の高台に聳え、緑豊かな
駒ヶ丘をバックにして、赤い屋根
と白亜の瀟洒な館で、眼下一面
に広がるプリュウの芦の湖とで、
まるでスイスシャレーの様である。
バスは御洒落なエントランス前
に停車して、皆さん方ロビーへ。
先着の拓山寿郎様お二方と合流し
て、辰巳会指定の落着いた洋式宴

会場へ案内されて着席する。

先ず恒例の幹事の安東さんより、
ご丁寧なご挨拶とスケジュールの
案内があり、続いて長老の拓山寿
郎様のご挨拶と発声で、葡萄酒で
乾杯をして食事に入り、ゴージャ
スで芸術的な美しい、美味なフル
コースのフランス料理を芳醇な
美酒と共に戴きながら、楽しい飲
談が続きましたが、やがて食事も
終り、記念撮影と散策の為に大庭
園の方へ。

庭園は敷地一杯に広がる、旧岩
崎男爵、別邸の四万五千坪を擁す
る広大なもので、園内には約三十
種類、三千株の真紅のつつじがし
たたる満開。眼下の芦の湖のプリュ
ウと鮮かな、見事な色彩美を呈し
ており、下界では既に散つてしま
まっているのが、此処では七・八
百メートルの高度差があり、下界
と季節が一ヶ月程度の遅れの所為
か、今や満開に咲き誇り正にグッ
ドタイミング。この素晴らしい
花々に取り囲まれて、写真撮影と
は誠に光栄、幸せ一杯。美しいお
写真が、出来るのをお楽しみに。



山のホテルつ、じ素晴し辰巳会
三郎

撮影後、皆さん方、三三・五五
に散策されて、各種のつつじに
シヤクナゲを鑑賞され、あちら、
こちらでシャッターを切られて満
喫されました。

十五時頃にホテルロビーに全員
集合され、至れり尽せりの幹事さ
ん方より、箱根の銘菓をお土産に
と戴きました。今日も又並々なら
ぬご配慮と、お骨折り下さいまし

た幹事さん方に、皆さん方感謝の
気持ち一杯でした。(記I・S)

今村 孝子

- ・ 近き富士前に横にと眺めあり
風薫りたるあ箱根路や
- ・ 薫風に富士も微笑む辰巳会
- ・ 芦の湖を廻りし船につばめ飛ぶ
にぎわいし山のホテルは
しゃくなげと 色とりどりの
つつじ麗わし
- ・ 見送りし夫と別れて一人旅
旅情あふるる列車の響き
走る景色に大空広し

辰巳会東京支部春季例会出席者

平成八年五月三十日(木)

箱根『山のホテル』で会食と庭園散策
(五十音順・敬称略)

田代 よし子	建部 清也	請川 孝子	今村 三郎	安東 浄田	芦原 一立
同 伴	澄子 長橋 忠男	和子 西川 明子	拓山 寿郎	田 辺 満寿子	花 實
計	十六名	(現地参加)		(現地参加)	

東京支部 秋季例会

平成八年十月十七日(木)
小石川後楽園・庭園散策

数日来よりの秋雨前線型の、うつつうしかかったお天気模様も、昨日よりすっかり変わり久し振りに快晴となり、今日も引き続き爽やかな秋空が広がり、正に天高く天気晴朗で、東京支部の例会はいつも晴天で誠に有難い事でありませう。

今回は都内、小石川後楽園の庭園、史跡を散策・鑑賞する事になりました。集合は園内、涵徳亭別館に十二時三十分となっておりますが、早目に着かれた方は適宜園内を自由散策とのご案内で、皆さん方早目に着かれ三三・五五、散策される中、神戸本部より森幹事さんが参加され、一段と華やいだ楽しい雰囲気を出されました。此処、小石川後楽園は東京ドームに隣接した、東京のど真ん中に在って周囲の樹林により都心の騒

ムとなっている……とのご挨拶がありました。この度、速水様が読売新聞紙上に『わたしの道』と題されて、平成八年八月五日から五回に亘って掲載された、同社経済部の松田次長さんとの対談記事を取纏められた小冊子を、ご丁寧(テイネイ)に皆さん方にご持参され、早速皆さん方拝見して感銘されました。引き続き長老の立花實様の音頭で乾杯の後、美味な会席の先付、生湯葉色海老山葵あん、を味わいながら爽やかなビールと、まろやかな水戸の銘酒銭形とで、まつこと皆様も手際よく次々と変わり、皆さん方杯を重ねられるにつれ、心豊から風格が出、大変賑やかになられ、あちら、こちらで昔なつかしい懐旧談に花が咲き、誠に楽しい限りでありました。時間が経つのがわからない程で、やがてお料理の方もデザートの水菓子のさっぱりした、抹茶アイスクリームとなり、時間も大部経って、速水様は所用のため中座されました。

音を遮蔽された、二万一千余坪の広大な敷地内は、まるで嘘の様に森閑として静寂であります。

秋の空此処行楽園静寂に

三郎

後楽園は江戸時代の初期、徳川御三家の一でした水戸家の祖、徳川頼房が、寛永六年(一六二九年)三代將軍家光から与えられた土地を、京都風の池を中心とした回遊式泉水庭園に自然風の手法を加味し、小石川台地の起伏に富んだ地形を活かして、築造し更に、二代目藩主光圀がこれを継承して、隣国、明の遺臣で亡命していた朱舜水の意見を用い造園され、随所に中国の名所の名前を付けた景観を配し、中国趣味豊かなものになっており、又、光圀は朱舜水に園名を選ばせ、舜水は後楽園の名を、宗の范文正の岳陽樓記『士当先天下之憂而憂、後天下之樂而樂』(士はまさに天下の憂に先だつて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ)からとつたものと云わ

その後も皆さん方の楽しい歓談が続きましたが、恒例の記念撮影となり、続いて安東幹事さんより、いつもの名調子で成人病予防についての貴重な健康養生訓のお話があり、皆さん熱心に傾聴しておられました。お別れの時間となりお開きとなりました。

このたびも江戸の銘菓『おとし文』をお土産として戴き、来年の新年例会には全員元気で再会しましょうと、名残惜しく散会いたしました。本日は有難うございました。以上

辰巳会東京支部春秋例会参加者

平成八年十月十七日(木)

小石川後楽園・会席料理と庭園散策

(五十音順・敬称略)

請川	今村	池谷	移川	安東	芦原
孝子	三郎	政雄	同伴	東	有
歌	長	森	速水	浄田	一立
計	橋	好	水	川	花
十四名	忠	子	優	明	實

れ、かの有名な大日本史の編纂も園内の史局で行われたとか。

昭和二十七年(一九五二年)三月に、国の文化財保護法により特別史跡、特別名勝に指定されているだけあり、庭園には涵徳亭前の広場の中央に、樹齢百年と云われている枝垂桜が天高く聳え、春にはさぞかし見事な美しい花が、爛漫と咲き誇る事でしょう。

次に藩祖頼房の求めによって、林羅山が京、大堰川上流から清水寺付近の景色が、中国の名勝地廬山に似ているところより名付けた小廬山とか。

光圀が建てた現存建物中、最も古いと云われている得仁堂とか……とにかく大したものでした。

水戸屋敷光圀偲び秋の日に

三郎

皆さん方ゆったりとした気分で見聞され、時々史跡の前で佇まれ、ゆつくり鑑賞され、庭園を巡り終えられたところで、幹事さん方より本日の主な行事のある、涵徳亭

- ・爽秋に会席旨し辰巳会
- ・天高し片水翁は今何処

三郎

- ・辰巳会鼠話で気が付きぬ

金子翁への感謝の気持

- ・小鳥居しいにしえ人の円月橋

たか子

(記 S・I)

原稿募集

内容 随想 短歌 俳句 詩

写真 鈴木往時の思い出

必ず原稿用紙に縦書で

四百字詰五枚程度

締切 随時

送先 神戸市中央区磯辺通

一丁目一ノ三九

太陽鉦工株式会社内

「たつみ」編集部宛



別館の辰巳会指定の明るい日本間に案内され、宴席に着席されました。参加者十四名。

植田支部長所要欠席のため、池谷政雄幹事さんよりご丁寧な、ご挨拶がありました。続いて、お多忙のところご出席下さいました昨年迄、経済同友会代表幹事として大いに活躍なされた、日商岩井(株)相談役速水優様より、明るい貴重なお話を拝聴、中でも城山三郎さんとの対談、鼠のお話より、金子直吉翁が財界で見直されブー

